

作品タイトル 青梅のへそ

著者名 梨田のりこ

あらすじ

莉々子が庭で青梅を採っているとあの世から父が戻ってくる。梅仕事をしながら交わされる父との会話。この世を去って三十年になる、と言う父に次はもう来ないのだと知った。十年前に口喧嘩をして会わなくなった友人に梅を再び届けることにした。三十年も十年もあつという間だ。わだかまりに捕らわれて損をするのは自分なのだと思う莉々子だった。

本編文字数 4800字

莉々子は両方の拳を腰にあて、眉間に皺を寄せながらたわわに実る青梅を見上げていた。一昨年、梅をもいでいる途中で足を踏み外し、脚立から落ちた。落ちたところが柔らかかな土だったおかげで、怪我をすることもなく尻もちをついた程度だったが、その衝撃がいまだに忘れられなかった。以来、梅の木に脚立を立てかけるのもひどく慎重になった。

「気をつける、落ちるなよ」

いつのまにか父が梅の木の脇に立っていた。尻もちをついたときもそうだった。気をつけろって言っただろ、と呆れ顔をしていた。

「今年もよく実ったな」

「相変わらず急にやって来るんだから」

莉々子はぶつぶつ言いながら、脚立に足をかけた。

「元氣そうだな」

その言葉は莉々子に言っているのか、梅の木に言っているのかよくわからない。父は愛おしそうに節くれ立った乾いた樹皮を摩ったり、ポンポンと叩いたりした。莉々子が生まれた年に植えた梅の木はときおり業者に剪定してもらうので高さはさほど変わらないが、幹の太さはがっしりとしている。

「高いところに実ってるのはもう採れないな」

「無理するな、怪我でもしたらどうする」

莉々子が収獲するのを父はただただ見上げるだけだった。

「少しくらい手伝ったら？ 娘がこんなにがんばってるのに」

そう言っても、にやにやするだけで木のそばに佇んでいる。

なんとか無事に収獲を終えた莉々子は、額や首筋の汗を拭きながらまだ残っていないか見上げてみる。木の下は梅の鮮烈な香りが満ち、強い日差しも和らいだ。

「今年は去年より暑いわあ」

「そうか、暑いか」

父は遠い目をして梅の木を見上げていた。

梅の実を家の中に運び込むと、毎年お裾分けをしている分を選び分けた。あとは丁寧に水で洗い、ざるにあけた。梅仕事は物心ついたころからずっと続けている。若い頃は手伝うのが面倒であれこれ理屈をつけてはその日は家にいないようにした。いつからか母を手伝うようになり、やがて母はそばで莉々子がすることに口をだすか、見ているだけになった。青梅のへそを竹串でとっていく作業は根気のいる退屈な作業だ。梅酒に梅シロップ、梅干しと作ったところで一人で消費する量は限られている。いつそのこと辞めようかとも思うが、今年もなんとなく続けていた。

莉々子は竹串を持つ手を止めて、ソファに座っている父を見た。父はいつまでたっても若かった。真夏だというのに、母の編んだニットのカーディガンを来て、それにシャツとズボン、靴下は履いていない、といういつものスタイルだった。

「今年もつくるんだな」

そうだよ、と答えながら汚れがきれいに取れているか目をこらす。

「お母さんとは会った？」

「いや、会わないな」

「そんなもんなんだね。劇的な再会をするわけでもないんだね」

父は面白そうに笑っているが、顔はどこか困ったようなものを浮かべていた。笑い顔には何か困惑したものがいつもそこにあっただ。外では違うふうに笑うのかもしれない。うちだけに見せる笑いなものかもしれない、そんなふうに思うようになったのは父がこの世のものになくなってからだった。

「お母さんはよく言ってたな。来征で会いたい人はいないって。全部忘れて違う世界に行くんだって」

「そうか、お母さんらしいな」

「そういうものなの？ あれから知ってる人に会わなかったの？ 親とかきょうだいとか」  
うーん、と唸ってから何も答えなかった。

「お父さんも会いたい人いないんだね」

父と話すと自分が娘だったころに戻る。無遠慮な口調がここぞとばかりに飛び出してくる。

「じっと見てるなら手伝ったら？」

「うん、そうだな」

そう答えるものの、実際そうすることは出来ないのだ。

父がこの世から飛び去ったのはあまりに急だった。病による突然死だった。何年もの間、莉々子は悲しみに沈み込んでいた。ようやく悲しみも薄らいだ頃、梅の木の下に父は立っていた。

「本当にお父さんなの？」

「まあ、そうだな。ニセモノじゃないな」

「すんごいびっくりしたよ、腰ぬけるかと思った」

「そうか？ そうだよな」

「初めて幽霊みたよ」

「幽霊か、なんか嫌な言い方だな」

「死んだときも突然だったけど、来るときも突然なんだね」

そう嫌味っぽく言うと、父は声を上げて笑った。

たまにやって来ない年もあって、翌年にそのことを軽く話ると、うっかりしてたな、時間の感覚がなあ、あつちとこつちじゃ違うんだ、と父は悪びれもせずと答えた。ここ数年はやって来なかったから、この世の未練もすっかりなくなって成仏したのだろう、と思っていた。いつまでも来続けるのも良いことではないような気がしていた。あの世のことは知らないけれど、行ったり来たりするものではないだろう。

去年亡くなった母は父がやって来ていることに気づかなかつたし、莉々子もそのことを言わなかった。言ったところで、何を馬鹿なことを言っているの、と言われるに決まっている。

「二階にあった箆笥、なくなってるな」

「うん、今年の春に処分したんだ。少しずつ終活していかないとき」

「終活って。まだそんな年じゃないだろう」

「もう六十過ぎてるんだよ。いつ死んだっておかしくないでしょ」

自分だって六十過ぎてすぐに死んだくせに、と言いたくなるのをがまんした。

「まだまだ生きるだろう。平均寿命だって伸びてるっていうし。百歳まで生きるのだって珍しくないだろう」

父は真面目な顔で言った。

「それにな、自分の死んだあとのことなんて心配するな。どうとでもなるんだから」

「わたしが死んだら誰も片付ける人はいないんだよ。それなりにちゃんとしておかないと」  
「だからこそ適当でいいんだ。誰かがやってくれるさ。人間はそうやってずっとやってきてるんだ。だいたいな、道端に死体が転がってることなんて見たことないだろう。いずれ誰かが片付けてくれるんだよ」

そんなことを言われると、確かにそんな気もしてくる。

「処分した箆笥の中に入ってたお母さんの服は全部叔母さんにあげたの。喜んでたよ。洋服たくさん持ってたから」

そうか、と父は少しだけふて腐れた顔をした。

「中身のはいつてないダンスってなんだか妙な感じもするしね。それで処分したんだ」  
莉々子はちよつと言いつつ訳がましく言った。

「物が減ると家の中がなんだか寂しい感じだな」

「そうかもね。でも寂しくないよ、気楽にやってるから」

父は真顔のまま何も答えなかった。

父が着ているカーディガンはなかなか捨てられなかったが、十三回忌のときに紙袋に包み捨てた。それまでに少しずつ父の物は処分していったが、莉々子はそのカーディガンだけはどうしても捨てられず、こつそりしまっておいた。母が編んだ手編みのカーディガンは真冬でも暖かく、父のお気に入りだった。洗ってしまったはずなのに、重ねた年月のせいで色は褪せてあちこちにシミが浮き上がり、以前の状態ではなくなっていた。それでも手のひらにはぬくもりがあった。

テーブルの上には梅のへその掃除をし終えた青梅がざるの上に積み上げられた。梅酒と梅干しを仕込んだ。残りは明日ジャムにしよう。

「お茶でも飲む？ 何がいい？」

「番茶、梅干しいれてくれ」

いつもの定番だ。風邪をひいたとき、これを飲むと治る、というジンクスを父はずっと持

ち続けている。エアコンを効かせた部屋で熱い番茶を二人で啜った。

「もう来ないと思ってたよ。お母さんが死んでわたしが寂しがってると思ったんでしょ。だから来たんでしょ」

父は、にやにやとした。

「大丈夫だよ、一人でもなんとかやってくから」

「心配はしてないさ。子供の頃からしつかりしてたからな」

「そんなふうに思ってるのはお父さんだけだよ。お母さんはわたしのことぼんやりしてるし、物事考えていないし、一人で残ったあと生きていけるか心配だ、ってよく言ってた。五十歳過ぎても結婚、結婚って飽きずに言い続けてたんだから。結婚したところでどうなるっってもんでもないのに」

「母親はそういうもんだろう」

「父親はそうじゃないの？ 結婚しなくても気にならないの？」

父は一度だけ、結婚しないのか？と尋ねてきたことがあった。莉々子はそんな気にはならないから、とだけ答えた。

「そんなものはしてもしなくても良いんだ」

「本当にそう思ってる？」

父は頷いた。父が亡くなったとき、莉々子は結婚せずに子供も産まなかったことを後悔した。孫というものを抱かせてあげれば良かったと、たった一度だけ、そう思った。

「孫、欲しかった？」

「いやあ、そうでもないな。娘だけで充分だ」

死んでも気遣うものらしい。

「そんなこと気にしないで好きに生きてらいい」

鼻孔がむずつとなつて涙ぐみそうになった。残念ながら、好きに生きられるほど器用ではないのだ。

「夕飯、何か食べたいものある？炊き込みご飯なの、お刺身もあるけど」

「いいな」

父は嬉しそうだった。

莉々子が夕飯の支度をしている間、父はテレビで野球中継を見ていた。昔は野球と言えばセリーグの人気球団しか中継がなかったのに、今は大リーグまで観ることが出来るんだな、良い時代だな、と言った。そしてホームランに歓声をあげ、三振に唸った。

食卓にはまぐろとイカの刺身、冷や奴、ミニトマトのサラダ、鳥ときのこの炊き込みご飯、すまし汁が並んだ。梅酒のロックで乾杯し、美味しいな、と言った。テレビでは野球中継が続いていた。父は楽しそうだった。

「梅の木って寿命が長いっていうけど、最近はある実がなくなってきたよ」

「あれだけ採れば充分だろう」

「そうだけど、面倒をみるのも大変なんだよ。消毒も二回、三回としないといけないしき。

業者に剪定してもらわないとならないし。それに梅酒や梅干し作っても、食べるのは自分だけだし」

莉々子はわざとらしいため息をついた。

「毎年、友達にお裾分けしてるんだろう」

「うん、そうだけど」

梅は昔からの友人たちに配っている。梅干しや梅酒、ジャムにシロップと、それぞれに楽しんでるようだ。

「喜んでくれる人もいるんだから、梅の木は大切にしなさい。梅酒も梅干しも作った方が美味しいな」

生前の父と最後に飲んだのが、母のつくった梅酒だった。普段はビールやウイスキーを好んで飲んでいたが、梅酒は別物だった。

「今年も漬けたから来年も飲みに来たら」

父は真顔のまま言った。

「三十年になるな」

莉々子は吹き出した。

「自分が死んでからの年数を言うなんて、そんな人いる？ あっ、人じゃなかった、幽霊だった」

「俺は幽霊じゃないし、本当は死んでないんだ」

「やめてよ、そんな哲学的なこと言うの」

哲学的か、と面白そうに言った。

夕飯を終えると、ずっと父は立ち上がった。

「帰るの？」

すでに背中しか見えぬ、手を伸ばせないほど儂げだった。

「もう来ないの？」

言い終わったときには、その背中が薄暗い中に吸い込まれていた。いつもそんなふうに見える。少くくは名残惜しうにしてほしいのに、と思う。莉々子は身に迫ってくるような静けさを打ち消すように声を張り上げた。

「三十年か、もう三十年たったんだ」

莉々子の声は家の中を駆け巡っていき、天井の隅っこに虚しく溜まった。

後片付けをすませたあと、青梅のお裾分けする準備をした。十年以上前まで青梅を届けていた友人がいたが、口喧嘩が元で会うことはなくなった。今となっては何が原因だったのかも覚えていないが、気まずさは消えないまま梅を届けることはなくなった。その時期の訪れを喜び、梅仕事をする友人の一人だった。

「会っても会わなくても十年か」

手のひらにある柔らかな産毛に覆われた実の詰まった青梅を、あの人にも届けようと選り分け始めた。電話番号も住所も変わっていないはずだ。変な意地を張ったところで何も得るものはない。自分で自分に語りかけてばかりいるのも時には飽きる。

三十年も十年もあつという間に過ぎて、今日一日もその中に呑み込まれていく。わだかまりに捕らわれて損をするのは自分なのだ、と呟きながら梅のへそを掃除する人たちのことを思うのだった。

【完】